

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：32644  
 研究種目：基盤研究(C)（一般）  
 研究期間：2019～2022  
 課題番号：19K02222  
 研究課題名（和文）子どもの願いを裏切らない虐待再発防止が確実な援助方針作成ガイドと教材の開発  
  
 研究課題名（英文）Learning resources for child abuse prevention with children in the middle  
  
 研究代表者  
 菱川 愛（Hishikawa, Ai）  
  
 東海大学・健康学部・教授  
  
 研究者番号：30338769  
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：極端な言い方をすれば、児童相談所に子どもを盗られたという気持ちになる保護者と児童虐待の再発防止に責任をもつ相談機関の職員が、どのようにして「一緒に」子どもたちが守られる環境をつくるという仕事に着手することができるのか。特に子どもたちの声（願い）に応える、子どもたちからして保護者と相談機関に応えてもらっているという手ごたえが感じられる結果を虐待再発防止の支援の中で出そうという時、面接と言う場面でソーシャルワーカーは何をしているのかを学ぶことができる動画教材と付属のテキスト教材を作成し、ウェブ上で公開した。<https://sofs.jp/>のトップページの「専門家向け」のタブからログインして閲覧可

#### 研究成果の学術的意義や社会的意義

2022年に成立した「児童福祉法等の一部を改正する法律」に基づき、現在、新たなこども家庭福祉のソーシャルワーカーに関する認定資格を設ける準備が行われている。児童虐待の再発防止に関連してつくられたこの資格の取得者が、子どもたちや保護者と実際に相対する場面でどのようなことができる技量をもった専門性を示すことができるのか。本研究では、抽象的な話に留まらず、面接場面のロールプレイと言う実際場面に即した動画教材を現場従事者らと開発し、成果物はweb上からアクセスできるようにした。「こどもがまんが」の援助の具現化の一助と考える。

研究成果の概要（英文）：In extreme terms, how can parents who feel that their children have been taken away by the Child Guidance Centres and whose staff, namely social workers, responsible for preventing recurrence of child abuse "work together" to create an environment in which children are protected? We have created video materials and accompanying text materials that enable you to learn what social workers do in interviews, especially when they are trying to respond to the voices (wishes) of children and to produce results in support of the prevention of recurrence of abuse in which the children feel that they were listened to by their guardians and staff of the counselling agencies. The deliverables were made available on the web so that they could be accessed by as many professionals as possible.  
<https://sofs.jp/>

研究分野：ソーシャルワーク

キーワード：ソーシャルワーク 児童虐待 サインズ・オブ・セーフティ・アプローチ チャイルド・フォレンジック・インタビュー

## 1. 研究開始当初の背景

児童相談所が対応する児童虐待の事案は、20万件を超え、増加傾向は変わらない。児童相談所に配属される職員は、数年でまた別の職場に移動し、3年未満の職務経験の職員が大半を占めるのが相談機関の現状である。

2019年当時も現在も児童虐待問題に対応する行政機関は、直接対人援助の場面で参照する内容に変更点はない。一例を挙げると、2018年5月、他県から東京都目黒区に転居してきた家庭の女兒(5歳)が虐待のために死亡した事例を受けた「子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について」(厚生労働省社会保障審議会、2018年10月)では、アセスメント・シートの利用の徹底を推奨している。アセスメントのIT化の試みもあった。これは、「どのような状況だったのか」をわかろうとする過程に介在するソーシャルワーカーが、子どもたちやその家庭の状況をあたたかも血液検査を行うようなわかり方で良しとするようなものである。

状況を理解しようとする時、チェックシートを使うという時は、その前提に「これが標準値」というものがある。この理解の仕方は、「私たち抜きに私たちのことを決めないで(Nothing for me, without me. Nothing about us, without us.)」という言葉に象徴される人権尊重に根差した取組みとは異なるのは明確である。

## 2. 研究の目的

私たちの問題意識は、子どもたちの声が援助のあらゆる段階で尊重され、尚且つ虐待の再発防止を確実にするソーシャルワークの援助のあり方を示す教材を作成し、専門性向上に資しようというものであった。

## 3. 研究の方法

「虐待だけでなくしてほしい。そして家族と元通り生活したい」と言う子どもたちの一番の願いを叶えることができた要因を浮き彫りにする質的研究を行い、ここにソーシャルワーカーが大きな役割を持つことを確認した上で、現場従事者らに研究協力を求め、ソーシャルワークの動画教材制作を行った。

## 4. 研究成果

「虐待だけでなくしてほしい。そして家族と元通り生活したい」と言う子どもたちの一番の願い(特性)を叶えることができた要因を浮き彫りにする質的研究を行った。2019年10月から12月にかけて児童相談所と研究協力の内容について協議し、事例の選定をお願いした。併せて「人を対象とする研究」に関する倫理委員会(東海大と東京福祉大学)に申請をし、承認を得た。2020年1月から3月にかけて3つの児童相談所から6事例に対する半構造的インタビュー調査を実施した。

インタビューに先立ち、児童虐待対応における望ましい特性の要因を明らかにするために「特性要因図」が分析の枠組みとして有効と考えるに到った。特性要因研究の第一ステップとして、2019年9月に児童虐待対応経験のある5名の自治体職員の方とブレインストーミングを行った。その結果、大骨(家族、子ども、ワーカー、組織、プログラム、計画、フィードバック)を確認し、半構造的面接の質問項目とした。インタビュー調査の下敷きとなった大項目の抽出については、東京福祉大学・大学院紀要10巻2019年に「短報」として掲載することができた。得られた音声データは、文字起こしし、MAXQDAを用いて分析を行った。この結果は、東京福祉大学・大学院紀要11巻、2020年に「調査報告」として掲載された(査読付き)。

この後から子どもの願いを裏切らない虐待再発防止が確実な援助方針作成ガイドと教材の開発のための事例と教材(媒体)について検討し、試験的な教材制作を行った。

2020年2月、イギリス、アイルランド等において児童虐待対応のソーシャルワークとITの活用の事例に詳しいPippa Young氏(Elia, Ltd., Director of Information Technology and Practice Alignment Department)とミーティングを行った。児童虐待対応における専門性向上のための媒体としてモバイル・ソリューションやアプリケーション・ソフトの可能性についての示唆を得ることができた。

教材制作の過程では、まず国内の重大児童虐待事例の報告、当事者の語りを読み込んだ。また、

児童虐待対応に携わる職員向けの教材の内容を確認をした。本研究のきっかけとなったフォレンジック・インタビューが求められる重篤事案としての性的虐待事例を題材とし、フォレンジック・インタビュー動画を視聴した援助者が、危害の重篤さにもかかわらず、子どもの願い(家に帰りたい、家族の関係を壊したくない)を中心にした援助の組み立て、見通し(建築で言うところの図面のイメージ)を描けるようなガイドを作成する必要性を確認した。教材の導入部となる事例及びそのフォレンジック・インタビュー場面をどのように提示するかを検討を行ない、アバターを利用した試験的な教材動画を作成した(2本)。

2021年には、児童虐待再発防止の現場従事者向けのツール及び動画教材の制作を行った。具体的には、以下の二つである。

(ツール) 児童相談所がどのような行程でもって子どもが健やかに育つ環境を家族がつくっていく事に成功するように援助するのかをわかりやすく示したリーフレットの作成に着手した。既に自前のリーフレットを作成している児童相談所に協力を求め、検討を進めてきた。結果として、家族に援助の全体の流れについて見通しをもっていただけるようなリーフレットのひな型ができてきた。

(動画教材) 児童相談所が家庭から子どもを分離した日から始まる家族との面接場面を中心に家族との面接の導入部分、導入に続いて家族と一緒に状況を確認する方法の実際、③子どもとお話をする面接場面、子どもの声を保護者に伝える面接場面、⑤上記リーフレットを用いる場面、家族と協力者として子どもが守られる日常をつくることについて話し合う場面の動画制作に着手した。対立、葛藤に満ちた出会い頭の場面から子どものことで話になる関係を構築するとは実際、どのようなことをすることなのかをロールプレーを通し、目に見える形(動画)で示すことができるようになった。各動画には、技術解説書も付した。

しかしながら2021年、新型コロナウイルス感染症第4波、第5波のため、動画教材の作成の予定を組むことからして困難を極めました。特に研究協力をお願いしていたのが行政機関の職員であることは、所属機関(自治体)のインターネット利用そのものからしてオンライン上で進めることも困難、また会議ならびに制作会場が都内であったことから出張が認められないということも続き、当初予定を1年延長して動画教材の制作を行った。

2022年、現場従事者の協力を必須とする動画教材制作は二か月に一度の偶数月とし、児童虐待問題にかかる職員の専門性向上に資する教材を完成させることができた。現在、動画と解説文書は、研究協力者が所属する団体「SIGNS+」(さいんず・ぷらす)のホームページにある「専門家向け」のタブからログインし、閲覧できるようにし、成果物を多くの現場従事者にアクセスが可能にしている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 谷口恵子	4. 巻 11
2. 論文標題 子どもの願いを裏切らない虐待再発防止のケースワークの要素 特性要因図を用いた分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京福祉大学・大学院紀要	6. 最初と最後の頁 41-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 谷口恵子、菱川愛	4. 巻 10
2. 論文標題 子どもの願いを裏切らない虐待再発防止のケースワークの要素を探る	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京福祉大学・大学院紀要	6. 最初と最後の頁 p.75 - p.83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	谷口 恵子  (Taniguchi Keiko)  (50383138)	東京福祉大学・心理学部・講師    (32304)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------